2013 年 1 月
巻頭エッセイ
東條　加寿子

新年一考：　知の伝承を忘れかけた学校

　新年を迎えた。新しい年に際して、地球温暖化や人口問題などの地球規模の問題や日本のエネルギー問題を考えるにあたっては、「これから 30 年先には･･･」といった中長期的な未来を展望することが多い。一方、子どもたちや若者の教育の問題は、未来を担う人材の育成という観点からは確かに未来を展望する問題には違いないが、教育の現場での実践は現在に軸足をおいた日々の地道な活動である。その「現在」は未来を展望すると同時に、「これまで」としっかりと繋がっていなければならない。過去と現在を繋ぐ知の伝承。ともすれば価値が希薄になりつつある教育における知の伝承について考えてみた。

　先日、好著『古典を失った大学――近代性の危機と教養の行方』（藤本夕衣著、NTT 出版、2012）に接した。教育学研究者の藤本は、本書の中で大学の価値を古典を読む場として捉え直す試みを展開している。京都大学教授　佐伯啓思は「古典軽視大学改革の弊害」（産経新聞、2012．11．19）と題した論説の中で同書を引いている。佐伯は、「時代感覚が違う」という理由から古典が読まれなくなったことを憂え、その背景として、大学改革で「社会に出て役だつ学生をつくる」ことを基本方針として、ひたすら「専門的知識」を重用し、短期的で可視的な成果主義を追及してきたことを挙げている。両氏によれば、古典とは「人々の共有する価値」であり、「社会の規範や世界の見方などを模索する際の規準」であり、人間が生きることに関わる普遍的な「大きな物語」である。そして、佐伯によれば、今や古典は権威を失い、すべてが相対化され、「何でもあり」の時代となっている。

　これらの議論の中で「古典」は「専門的知識」に対しての「教養」と同義に論じられており、大学教育の中で「古典」すなわち「教養」が今一度見直されなければならないという主張がなされている。ここで「古典」を「知・知識」に置き換えて考えてみると、学校教育の中でほぼ同様の議論ができるのではないかと思う。ゆとり教育は、知識偏重からの脱却を掲げ、子どもたちの主体的で創造的な学びを追い求めたものであったに違いない。情報が氾濫する現代において、主体的に情報を取得し、創造的に考え、問題を解決する能力を養うことを追い求めたものであったに違いない。そしてその結果、伏線として、権威的な知識の伝承に対する否定的な態度が埋め込まれたのではなかろうか。

　基本的知識基盤の（欠落とまでは言わないまでも）弱体化は、現在、初等教育から高等教育に至る教育の現場での最大の問題であると筆者は考えている。相対的にものを考えるためにはまず、「大きな物語」すなわちコンテクストを持たなければならない。創造

的にものを考えるためには自己の確立や価値観の確立が不可欠である。自律した主体性は、しっかりとした知識基盤の上にこそ築くことが可能である。数学の定理や物理学の理論、世界の歴史や地理、言語構造（文法）の基礎知識は学校教育の中でこそ、しっかりと伝授されなければならないことを、今一度しっかりと捉え直したいと思う。

新年に際して人々は未来を展望するが、あえて「古典」の重要性に思いを馳せてみた。2013 年という「現在」がよい年になることを祈りながら。